

凹型の政治家・大平総理

安田正治

昭和五十四年五月六日の夕刻、瀬田の大平総理私邸では、米国から帰国した総理一行を迎えて話が弾んでいたが、初の訪米でカーター政権との間に友好と信頼の絆が結ばれたという確かな手応えを得て、人々の声は明るかった。

カーター大統領の質問に答えて

ひとしきり挨拶が済んだ後、人混みの中に私の顔を見つけた総理は「おお、アメリカでカーター大統領から例の言葉の意味を聞かれたよ。僕は『あれは政治家が最後に辿り着いた詠嘆の言葉です』と答えたのだが……」と語りながら、私を居間の隅のテーブルに誘った。そして、「二日のホワイトハウスでの晩餐会では、僕のテーブルには、『刑事コロンボ』のピーター・フォークから日本でも知られた人達を選ぶなど気をつかってくれた。いろいろな話題で賑わったあと、カーター大統領が『大平さん、貴方の本に『一利を興すは一害を除くに如かず』という言葉を引用していますが、あれはどういう意味ですか』と聞くんだよ。そこで僕は、こう説明したのだが……」と語りはじめたのである。

総理がわざわざ私に話しかけたのには、次のようないきさつがあった。新総理が誕生すると、その人柄や履歴などを海外に理解してもらうため、英文のPR用資料が作られるが、大平総理のときには「総理の最も好きな言葉、いわば座右の銘を一つ挙げて下さい」という注文があった。大平総理はとりわけ多くの

言葉を知り、大切にしていただけに、どの言葉にするか迷ったのであろう、私に「考えてみてくれ」と宿題を出された。翌日、総理官邸の秘書官室から小食堂に降りる階段の途中で「考えてくれたか」と聞かれた私は、耶律楚材の「一利を興すは一害を除くに如かず」はいかがですかと進言した。総理は考えながら数歩階段を降りたところで、「それにするか……」と同意された。

耶律楚材（一一九〇～一二四四）は、遼の王族の出であり、燕京（今の北京）がモンゴル軍に陥されたときには、二六歳で金の中堅官僚であったが、このとき成吉思汗にその資質を認められたという。楚材は政治顧問としてつねに帷幕にあり、西征の軍旅にも従ったが、占、医療、歴史、老荘の学に通じ、詩や音楽を愛するとともに、深く仏教に帰依して湛然居士と称した。また占領地の行政に任じて、都市や農耕の文明を野蛮から守ることを天職とし、その力量は卓抜したものがあつた、という。

カーター大統領に対する総理の説明は続いた。「昔、ケネディ大統領にお目にかかったとき、大統領に『貴方にとって選挙とはなんですか』と尋ねたことがありますが、一言で『シユース・レザーリング（靴底の革を摩り減らすこと）』だと答えられたあと、『選挙運動期間中は一カ月に一足の靴の底を摩り減らしてしまふ』といわれました。ケネディ大統領がなぜこのように大変な苦勞をしてまで政治家になるつもりなのかといえ、何とか自分の理想を実現しようとする情熱が強かったからではないでしょうか。

カーター大統領閣下も政治を志されたのは、少しでも良い社会を実現しようと考えたからだと思えます。ところが、全ての人にとって良いという施策などあるはずがなく、良いと思つた施策も、時が経つと思ひもかけぬマイナス面が出てきたり、リアクションが出てきます。こうして代々の政治家が、より良い社会を実現しようとして必死になって努力し続けた結果が、今日の社会なのです。

先程の言葉は、蒙古の成吉思汗やその後継者である元の大司オゴタイを援けた名宰相耶律楚材の言葉ですが、モンゴル流の苛政から文明を守るために生涯を捧げた彼が努力の果てに到達した悟りであり、理想

の社会を目指して努力し続けた政治家が、最後に辿りついた詠嘆の言葉であつたと思ひますと、説明したのだが……」と述べられた。

総理がこの言葉をスピーチの中に引用するのを私は幾度か聞いていたが、この言葉が、理想を目指した政治家が努力の果てに到達した境地であり、「最後の詠嘆」であると解説されたのは、このときが初めてである。私にはそれが、大平首相が自身の人生体験を通じて到達した境地であり、そこには、首相の為政者としての個性が凝縮して鮮明に表出されているように思われた。

この晩餐会で、カーター大統領と大平総理は個人的に親交を結び、その友情は総理が急逝されたとき、米大統領としては異例のことであつたが、自ら葬儀に参列してくれるまでに深まつた。一夕の出会いと一つの言葉の解説が、二人の政治家の心を深く結びつけるきっかけになつたのではないかと思われる。

私は人が先人の言葉を深く愛するのは、表面の字義もさることながら、その人となりや資質、政治手法や発想に相通じるものがある場合が多いからではないかと思う。

対照的な凸と凹の政治家像

一般に政治を志す人は、普通の人より強い信念、自己主張、行動力などを持つため、多くの政治家は、形象で象徴すると、きわだつた凸型となる。しかし、ごく稀に凹型で表した方がふさわしい政治家も存在する。凸型の政治家の発想の原点は、常に現在であり、自分が立っている地平である。目標を達成するためには、現状からブロックを幾つ積みあげればよいかと考えるタイプである。これに対して凹型の政治家は、理想の目標が発想の基準であり、現状はそこからどれだけ下にあるかと考え、その隔たりを埋めることを考えるタイプである。これを取律楚材の言葉を借りれば、一利を興すことを志すのは凸型であり、一害を除くことに大きな価値を見出すのは凹型だということになるだろう。凸型は努力の結果どれだけ高く

なつたかと考え、凹型は理想に未だだけ及ばないかと思うのであり、前者がプラス志向で現実主義であるのに対して、後者はマイナス志向で理想主義的である。そのため前者が楽天主であるのに対し、後者がペシミストでありがちである。凸型の政治家は、自らの努力を評価し成果に満足して休むことができるが、凹型のタイプは、理想は常に頭上にあり、現状に甘んじて休息することを自分に許すことができない。このため、政治の手法や政治家としての役割にも、凸型と凹型は自ら好みや得手、不得手が出てくる。凸型は、目標に対して積極的で直線的であり、多少の瑕瑾には拘わらない。これに対し凹型は、権力や地位は飽くまでも理想や目標を達成するための手段であると考ええる。従つて、政治権力を獲得するにも、そこに道義性や正当性を求めようとする。手段に対しても完全主義的な傾向が強く、受動的に見える。このため凸型は攻めに強く、凹型は守りに力を発揮する。

唐朝三百年の基礎を築いた二世太宗（在位六二八～六四九）李世民は、中国史上でも社会秩序が安定し、民生が充実した「貞觀の治」を現出した名君である。彼の政治問答を集大成した『貞觀政要』の第一巻第一編「君道を論ず」には、太宗が側近に「帝王の業、草創と守成と何れが難き」と質問した話がある。このとき創業を難とした者と守成を難とした者と両論に分かれたが、太宗は、それぞれの難事を認めた上で、「今、草創の難きはすでに往けり。守成の難きは、当に公等とこれを慎まんと思ふ。」と答えて、二十三年の在位の間、守成に専念した。

創業と守成は、その難しさの質を全く異にするので、何れが難きかを一概に比較することはできない。しかし東洋では古来、「守成は創業より難し」という認識が支持されがちである。創業は非常な難事であるが、目標を達すれば終わる。守成には、これで済んだという限界がない。絶えざる自制と克己、その終わることのない緊張は堪え難いものであり、そこに守成の難しさがあるようだ。こうして見ると創業は、凸型の人にふさわしく、守成を心に砕くのは凹型の人々がふさわしいといえる。

耶律楚材は成吉思汗に重用されながらも、世俗の榮達から離れて自由な境涯に憧れる心情を胸に抱き続けた。大平総理もまた、政治家としての使命感と自由な生活への憧れの間を揺れ動くことがしばしばであり、その間に苦惱する姿を見た人は少なくない。それが、あるひとには、政治家としての弱さと映り、あるひとには、人を惹きつけてやまない人間の魅力ともなっていた。このように二人の政治家には共通する資質を随所に見ることができ、とりわけ共通するのは凹型の政治家であるということができよう。

大福体制の成立と分裂に見る総理の特質

昭和四十六年四月、第三代の宏池会の会長に就任してからの大平総理は、三角大福の時代のリーダーの一人として、激動の七十年代の政局で中心的な役割を果たすようになっていた。それらの中で、総理の特質を考える上で最も特徴的な事件は、大福体制の成立とこれに対処するその態度ではなかったかと思う。

三木対反三木抗争当時、次期総理候補は大平正芳と福田赳夫の二人に絞られていた。だが、いずれを先にするかを決めることは容易なことではない。数で争えば大平、先輩後輩の順とすれば福田ということになる。二人は派閥の成り立ちも基本政策も異なる保守の二大潮流を代表し、終始、対立関係にあり、一朝一夕で和解できるようなものではなかった。この時、調整に当たった保利茂は、受皿の一本化に苦悩したが、大平は何の条件もつけず淡白な態度を示した。そこから一挙に政局打開の道が開け、保利が立会人となって大福協力の合意文書が作成された。この文書は婉曲に書かれているものの、本旨は「福田政権を先とし、大平政権を後とする。福田政権の任期は一期二年とし、両者は信頼関係をもって協力する」というものであった。ただ、この種の合意文書は、当事者に守る気持ちが必要で、一片の紙切れに過ぎない。これに意義があるとすれば、紳士協定としての道義的拘束力のみであり、それは福田と大平の信頼関係と人間性にまかされる問題であった。大平は、それらの全ての事情を承知していた。その上で、この道義性

に自分の政治生命を賭けようとしていた。誠意を尽くすことで、大平、福田の信頼関係を高め、結果として合意の実現性を確実にしようとする態度は、確かに効果をあげた。福田総理はもとより、立会人の保利衆議院議長や福田側の團田直代表らも、道義的に縛られ、責任を感じていったことは間違いない。だが、大平のこの態度に、殆どの友人や同志は危惧の念を抱き、いろいろな形で忠告した。

しかし、大平は友情ある説得に対して、頑として耳を貸そうとはしなかった。予備選で福田の圧倒的な優位が伝えられはじめた秋口、大平幹事長は「総理になるだけが政治家の目的では無いだろう。なれなければいけないではないか……」とまで言うようになり、総裁公選の準備を進めることを抑え続けた。このときの大平は、自分の政治的運命を天にゆだね、自らの信するところに従って行くところまで行こうと腹をくくっていたのではないかと思う。ただ、自分の決断が誤りだったとき、多年、大平政権の実現を願って献身してくれた同志にどう応えたらよいのか、自分が身を引けば済むという問題ではないだけに、この選択を責め徹すことは重い賭けであり、孤独で厳しい道であった。不確かであればあるほど信義を尽くし、道義性を高め、批判や不安に黙々と耐えている大平幹事長の姿は悲痛でもあった。

大福体制の二年間、数十回を数える二人だけの息づまる会談では、紳士協定を間にして、大平幹事長は誠意を尽くして迫り、福田総理は道義に従うべきか任期を延して政権に花を添えるべきか、権力の座の上で揺れ動いた。しかし、二人の会話の中でこれだけは避けようと確認し合った最悪の結果である全面衝突の道に陥っていった。この争いは大逆転のすえに大平が勝ち、政権の座を手中にした。しかし、激烈な抗争によって権力を奪取したことは、大平にとって不本意であったと同時に、その後の人生を根本からねじ曲げてしまった。権力闘争を避けようとした総理が、かえって四十日抗争や内閣不信任案の成立、衆参同日選挙への突入と、止めどもない抗争の渦中に捲きこまれていく。その果てに同日選挙の冒頭、新宿の街頭で倒れるに至ったのだから、私にとっては政治権力の魔性をまざまざと見せつけられた思いであった。

「サミットは小事、政局の安定こそ大事」

大平総理は、かつて池田勇人総理ががんセンターに入院したとき、池田内閣の幕引きと政局の收拾に当った経験がある。それから十六年、こんどは自分が池田総理と同じ立場でベッドの上に横たわっていた。病床に横たわるその顔には、人事を尽くして天命を待つ人の安らかさがあった。「こんな形で自分の政治生活の幕を引くのか……」という権力に無縁となった解放感すら漂っていた。ただ気がかりだったのは、政局に直接にかかわる選挙の情勢と投票日に重なるベネチア・サミットに出席できるかどうかであった。

サミットは国益にかかわる問題であり、使命感としても出席したかつたろうし、花道にしたいという思いもあったらう。他方、ベネチアに飛ぶことは生命にかかわる問題であり、もしもの時には政局の混迷を招くことは必至であった。病状が回復しはじめ選挙戦が進むにつれて、総理は選挙情勢を聴きたがっていた。「僕には何のインプットもない」と顔を見るたびにせがまれるのだが、ストレスの原因になるような問題を話題にできるわけがない。そんな総理が自分の良さそうなとき、進んで話題にするのは、政治家の人物月旦であった。しかし、二度目に人物評を語り出したとき、私は「総理は後事を託す人物の選択に入り、私たちの反応を見ている」ことに気がつき、話題の重大性を実感させられた。

総理が急逝する一日午前、その顔色を見にうかがった私に、総理は思い決したような口調で「サミットは小事だな、大事なのは政局の安定だよな……」と切り出した。この話題から逃げることは許さない、という切迫感と気迫がにじみ出ている声色であった。しかし、「総理に精神的緊張を強いることは禁物である」という強迫観念にとらわれていた私は、この日も数分のやり取りの後、総理の「待て！」という制止を振り切るように病室から逃げ出してしまった。総理の胸中を忖度して政局收拾の手順を考えるのに熱中していた私は、「もう少し健康が回復したら何もかも話そう」という思いであった。

こうして、「サミットは小事、政局こそ大事」という言葉が、私の聞いた大平総理の最後の詠嘆の言葉となつてしまった。

鎮魂の政治家・西郷隆盛も凹型

かつて、四十日抗争が山を越えた昭和五十四年十一月上旬の一夕、私は、藤波孝生氏の招きで京都市立芸術大学の梅原猛学長と三人で会食する機会を得た。話が最近の政界の激烈な抗争と鎮魂の必要に及んだとき、梅原学長は「日本の歴史の中で鎮魂は、最も大切な『まつりごと』であるが、まれに大きな凹型の政治家が出ると、鎮魂をやっている。最近では西郷隆盛がそれにあたる。私は、政界を外から眺めているだけだから、はっきりとは断言できないが、もしかすると大平さんは珍しく凹型の政治家かも知れないと思う」という話をされた。

在職当時、大平総理の心を占めていたものは、やり切れない思いの政治葛藤とこれに対する鎮魂への願いであつた。このため、肝胆を砕き、難題に耐え、どれだけ無理をしたか知れない。しかし、荒れ狂う怨念を鎮める道は、ただ誠意を尽くして職務に精励するしかなかつた。

西郷隆盛は招魂社を建立して、幕末の動乱に恨みを呑んだ荒魂を慰めようとした。しかし維新後、死に場所を求め続けた西郷が本当に鎮魂の志を果たしたのは、城山で倒れたときではなかつたらうか。

大平総理が殉職したことにより、七十年代の政局は一時鎮静した。総理も政局という祭壇に一身を捧げたことにより、凹型の政治家として終わりを全うしたのだと思う。

(第二次大平内閣総理大臣秘書官)